

知らなかった。

その他、半日は碎石、半日は醬油樽を頭にくくり、後向きに坂をかけ降ろさせる。そんな重労働が、昭和二十一年六月二十五日まで続いた。戦後そのために死んだ人がある。無茶して殺されたと同じである。

私たちは、二十一年六月三十日名古屋に上陸、復員したのである。戦後の俘虜に対する処置は、国により、時により、戦争国の人により、随分差のあることを知った。勝った者が、強い者が正しい、負けた者は賊軍なのだろうか。

## アンポン、ケイ、セラム島 私の 体の戦後は終らない

福岡県 鳥井 督 三

―鳥井さんは技術系だったので船舶工兵になったのですか。また何年の徴集ですか。

私は大正七年五月生れですから、昭和十三年徴集兵

ですが、徴集を延期していたので、大東亜戦開戦早々の昭和十六年十二月十日に直接朝鮮の竜山に入営（門司集合し）したのです。

竜山の野砲連隊で教育を一年間ぐらい受けたが、部隊から二人だけ砲部隊（船舶隊）に転属して、横浜へ行つて上陸用船艇を作ったのです。百人ぐらい乗れるものをベニア板です。私は技術屋でも機械科出、部下は工作機械の職工だった人たちでした。船に接着剤を使うのだが、足りないので釘だけでベニア板を張る。ところが、釘と釘との間に水が入り沈んでしまう。今考えると、これでは勝てる筈がない。昭和十七年だったのに、もう物が不足していたのです。

四―五ヵ月後か、宇部で編成替えになり、昭和十八年一月か二月頃だったか、四隻の輸送船で出港、それには四―五隻の護衛艦がついて来た。フィリピンに着いたら護衛艦はほとんど引揚げた。マニラに半月ぐらいで、また四隻の船団を組んだが、その船は水を運ぶ船で、船倉が仕切っており、三、四発魚雷をくつても沈まないといっていました。

ミンダナオ沖で潜水艦の雷撃で二隻沈没。夜だったので私たちはわからなかったが、アツという間に沈んでしまったといっていた。我々の船はミンダナオに逃げ込んで半月待機していました。

一十八年になると、もう南方の海域の制海権、制空権もだんだん連合軍に移っていったわけですが、無傷の船団は少なくなったでしょう。

ミンダナオからまた船団を組んだ。護衛は駆潜艇一隻だけだった。アンボン島に八時間もすれば着けるといふ所で、夜中の二時頃でしたか魚雷を食った。「前の船が沈められた」というので甲板に上がったら、間もなく魚雷が来た。一発当たった時は、船がブルブルとただけだったので、やはり水船だから沈まないと思つた。ところが三発目の魚雷が船の真中に当たった。天に沖すというとおりの火柱が上がった。

その時、避難命令が出た。「飛び込め」といって、両親から頂いた日本刀をおいて飛び込んだ。引き上げられるまで十二時間ぐらい、救命胴衣は着ていた(訓練していたので)が靴の片方が脱げていた。沈没する

時、少しでも早く船から離れるように浮き上がったが、その時船尾がかすかに見え、一瞬にして沈んだ。

真暗闇の中、戦友たちと筏につかまっていたが、駆潜艇が爆雷を落し、鯨の来るのを、助けられるまで防いでくれた。その時、一人の足の無くなった人がいた。「班長、この兵隊足が無いようですよ」というので筏に引き上げたが、可愛想だが助からなかったでしょう。

駆潜艇一隻ではどうにもならなかった。私共が引揚げられた時も駆潜艇を狙って何発もの魚雷が来た。一隻の輸送船は先に逃げていったが、残った船に駆潜艇から乗り移った。何度も何度も、駆潜艇が浮いている人たちを救って、輸送船に引き上げた。しかし、目の前で鯨に食われているのを私は見た。

私の部隊は三百人ぐらいいたが、現地に着いた時、百三十名切れていた。半分以上は海の藻屑になってしまった。その間、一回も日本の飛行機は来ない、駆潜艇一隻だけで、まさに見殺しだった。

アンボン島へ輸送船が着いて、暁部隊の小さな船(大発?)に乗って木の葉のようにもてあそばれ、三日間

ぐらいかかってケイ諸島の本島に上がったが、その間幸いにアメリカの飛行機が来なかったので助かりました。

「ケイ島というところですか、島での日本軍の状態は。」

ケイ島はニューギニアと豪州との間のアラフラ海の北にある群島です。本島の森の中に入ったらまったく太陽が見えぬ珊瑚礁の大ジャングルです。そのため日光が当らぬので何も作物は出来ない。食料はまったく無い。大とかげも蛇も鼠も鶏も皆食ってしまった。この島にいる間、米を三回ぐらい食べたかしら、高野豆腐が九で米が一ぐらい、それが年に二度ぐらい出た、天長節の時ぐらいだったと思う。

我々がケイ島に来たのは前部隊の補充員としてだった。何のために補充か、豪州大陸が目の前にあるのに、八千人の兵隊で豪州を攻めさせるのか。上の人は何を考えていたのか、ムチャクチャだ。指揮系統が無くなつたのか。状況の変化を考えないで、初めの計画通りに実施したのか。

食料事情のことですが。この島のタピオカの中には青酸カリが含まれているという。他の島のタピオカは食べられるのに、他の島のタピオカをケイ島で作ると青酸カリが含まれてか、食べる者が死んだ。おろし大根のようにすって太陽に乾すと青酸カリは抜けるが、同時に栄養分も抜ける。食べると腹はふくらむが栄養にはならないのです。

汁は海水で、実は朝顔の葉、これが不味い、こんな不味いのが世界中にあるのかと思った。しかし、その葉によつて生きのびたわけ、一年終戦が遅れたら八千人全滅したでしょう。

私は終戦の五、六ヵ月前、師団命令で、アンボン島の北に四国ぐらゐの大きさのセラム島というのがあつた。その島にオランダが開発した石油の採れる施設がある。私等は命令により「島へ行って、海軍から石油を貰つてケイ島へ送れ」ということで、部下の上等兵と行った。

島伝いに行くが、一晩では着けない。今までは途中米軍にやられたようだ。それで、今度やられたらケイ

島引き揚げを中止させるを得ない。一番最後に命令された私たちがたどり着けた。舟は艀で漕ぐ、囲りは潜水艦が一杯、木舟の手漕ぎでないと言で発見されるし、昼間は飛行機。それを避けながらやっと着けたわけです。

―二人でとはなかなかひどい命令ですね、苦勞話を聞かせて下さい。

私等は海軍から石油を受け取り（ドラム缶に詰め）暁部隊の上陸用舟艇に渡す仕事をした。舟艇は虎の子の一隻だけで、指揮官は曹長だった。

その間、私等は原住民の中で生活した。彼等はまったく協力的だった。言葉が判らないので手振り、身振りです。しかし、酋長の命令でないと動かない。我々を「トワン（旦那）」と呼んでいたので、現地人が必要の時は酋長に頼んだ。陸軍の中隊長と連絡をするのには一週間ぐらいかかった。

そのような距離のはなれている所にいたが、命の心配や襲われる恐れはない。我々は移動する時は、次の部落、次の部落へと泊まりながら移動する。彼等は灯

油を欲しがっている。ドラム缶十本に一本ぐらい灯油が混じるが、部隊では灯油は不要だった。その灯油が宿泊料となる。その間四―五回ぐらい行つたと記憶する。また、マラリアで一週間ぐらい死線をさまよつた。中隊の衛生兵が「これは死による」と言っていたのが聞こえたが、私はものが言えなかつた。

―終戦の時はどうして知つたのですか、また復員まではどうしていましたか。

終戦になつたが、現地人は日本人に近かつた、好意的だった。中隊長は「いざという時は死ぬ」と手榴弾を渡されたが、手榴弾を棧橋から投げて魚獲りをやつた。六発全部魚獲りに使つた。一発でサンパン（二メートルぐらいの小舟）一杯の魚が獲れる。それを現地人たちと分ける。私たちは二人、彼等は四―五十人ぐらいではなかつたかな。

塩が無くなつたので、塩の作り方を教えてやつた。オランダ領だつたのにオランダ人は何も教えないで統治していたので、土人は何も知らない。

終戦はその島で聞いた、中隊長に呼ばれてだ（手榴

弾を渡された時)。その後ケイ島に帰った（上陸用舟艇が迎えに来た）が、その時現地の人には涙を流していた。舟で迎えに来たのは他部隊の人で、石油を取りに来た人ではなかった。

ケイ島に戻ってからが大変だった。部隊に百人ぐらいの台湾軍属がいて、その班長にさせられた。彼等は「戦勝国だ。戦争に勝ったのに何故お前たちに使われるのか」と騒ぐ。「日本人を皆殺しにして班長だけは助け、台湾に連れて帰る」という。それをなだめるのに大変で、毎晩騒ぐのですから。

豪州の軍隊が上がって来て「お前たち生きていたか。」といって食料を置いていってくれ、それで助かった。それからは空襲の心配がないので、ジャングルを切り開いて太陽の光が入ったので耕作をした。ナス、胡瓜、トマト（内地から持って来た種）等を作った。

何時迎えるの船が来るか判らないので、少しずつ配給になる。しかし、若いのでだんだん体は良くなる。生命力は大したものだと思った。船が入るのがわかったので配給食料を多くしてくれたが、その十日間ぐらい

で体はメキメキ回復していった。

二十一年七月ごろ、和歌山県に上陸、DDTなどかけられて復員した。その後二ヵ月ぐらい神経的障害を起こしたが、原因が判らない。一時は気が狂いそうになる。午後になると綿のように疲れ、立っておられない。

九大の先生が最高の眼鏡に一寸度をつけ、それをかけてからひどいのが治ったが眼球が痛くなる。ある病院の先生に材木を納めていたので、代金を頂くため座っていたら、「貴方は戦地での栄養失調によるためだ」と診断をされた。涙が止めどなく出るのが、十何年間、六十過ぎまで苦しんだ。その後、健康食を摂り、薬害を知り、食生活を改めたりしたため、涙の出るのは良くなったが、ずいぶんその間金と時間をかけた。

私の体は未だ戦後は終わっていない。ペンや鋭った物が自分の方に向いていると、自分に飛び込んで来るように錯覚をする。他の人に説明しても判らない。ですから私は今でも鋭った物を横に直すようにしている。